

J-BINGO in AGU: Japan Bridge for International Governmental Organization in AGU

<プロジェクト・メンバー>

研究代表者

飯島泰裕^{†1}

Iijima Yasuhiro

研究分担者

米山明日香^{†1} 菊川人吾^{†1,2} 上野亮^{†1}

Yoneyama Asuka, Kikukawa Jingo, Ueno Ryo

^{†1} 青山学院大学 社会情報学部

School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University

^{†2} 経済産業省 商務情報政策局

Ministry of Economy, Trade and Industry, Commerce and Information Policy Bureau

キーワード：国際公務員，国際機関，キャリアプラン

Keywords: International civil servant, International organization, Career plans

1. プロジェクトの実施背景と目的

将来的に、国際機関を含む、国際的なフィールドで働く日本人職員を増やすことが、日本全体としても喫緊の課題となっている。そのため、青山学院大学社会情報学部においても、学生時代から国際的なフィールドで働く日本人職員との接触機会、国際機関などでのインターンシップ等の機会を設けることで、国際機関職員候補を始めとした、国際的なフィールドで活躍できる人材の育成が必要である。

こうした背景もあり、2015年度より、学生の国際機関等に対する興味や関心を高めるため、関係機関の協力を得ながら、講演会等を実施している（飯島他、2016）。これは、学生達に対し、国際機関を含む、国際的なフィールドも、将来の就職先のひとつ

として意識させることを通じ、最終的には、国際的に活躍する日本人を増やすことを目的としている。加えて、2016年度からは「プロジェクト演習入門Ⅰ／Ⅱ」、2017年度からは「プロジェクト演習Ⅰ／Ⅱ」、2018年度からは「特定課題演習Ⅰ／Ⅱ」と年次進行により、各学年の演習科目においても、選択テーマの1つとして扱うことで、自分のキャリアを考えると共に、より深く、国際的なフィールドで働く、日本人と関わる機会を創出してきた（飯島他、2017）（飯島他、2018）。

こうして、2018年度より各学年の学生が、何らかの形でJ-BINGOプロジェクトに関われる環境を構築した。そこで本年度は、授業を通じた活動だけでなく、新たに、今後のカリキュラム充実のための国際機関連携先調査を実施した。本稿では、こうした目的の下、実施してきたプロジェクトの進捗状況、今後の実施方針を報告する。

2. 授業を通じた国際的なフィールドで活躍できる人材育成の取り組み

2019年度は学部1～2年生と4年生を対象に活動してきた。1年生には、国際機関の存在を意識させるため、「English Communication I / II」の時間を利用し、計2回の講演会を実施した。2年生は「プロジェクト演習入門 I / II」の選択テーマとして、国際機関等でのインターンの実現に向けて、国際的に働くことを理解するために、ヒアリング調査などの調査活動に取り組んでいる。4年生は「特定課題演習 I / II」として、これまでの活動の集大成となる研究成果として、国際機関をより身近に感じてもらうに加え、J-BINGO プロジェクトに対し、興味関心を促すためのパンフレット作成、J-BINGO プロジェクトの活動成果等を集約するための情報プラットフォームとなる、ウェブサイト構築を行っている。

これらの各科目での活動に加え、月2回程度、J-BINGO プロジェクトに関係する2年生、4年生の学生が集まるゼミを開催することで、お互いの調査等の進捗状況を共有すると共に、先輩から後輩に対し、ヒアリング調査等に必要なノウハウの伝達を図ってきた。更にゼミの際は、実際に国際的に働いている方をお招きし、様々な話を聞く機会を設けた。本章では、各学年における、具体的な取り組み内容を記す。

なお、例年、3年生は「プロジェクト演習 I / II」の選択テーマとして、2年生時の活動成果を活かし、国際機関等でのインターンの実現を目指し、活動をしている。今年度も開講準備はしたが、同科目における、J-BINGO テーマ選択者がいなかったため、本プロジェクトとしては、開講をしなかった。

2.1 English Communication I / II における取り組み状況

1年生を対象とした取り組みとして、社会情報学部1年生の前期必修科目「English Communication I」及び、後期必修科目「English Communication II」の授業内で、計2回、4度の講演会を実施した。2017年度までは、年4回、1年生全員を対象に大教室で、原則、英語を使用言語とする講演会を実施し

ていた。しかし、それまでの様子を見ると、英語の得意な学生のほうが、J-BINGO プロジェクトの活動に対して、興味関心を持ちやすく見えた。

そこで2018年度は、同科目において、英語の得意な学生が集まるクラスの学生とその他希望者が、参加する形式に変更した。実施教室も、講師と参加者がコミュニケーションを取りやすい小教室での講演会を2回、同内容で2度続けて実施する形式に変更した。ただし、使用言語に関しては、英語科目での講演であるため、2017年度までと同様、原則、英語のままとした。

その結果、2017年度と比べ、講演内容の理解度やJ-BINGO プロジェクトの目的の理解度が向上したとともに、2年生や3年生での、同プロジェクトへの参加意欲も高まった。このように、講演会の参加人数は減っているが、一定の成果は得られたため、今年度も2018年度と同じ形式で実施することにした。講演を依頼した講師及び講演タイトル等は表1、講演会の様子は図1～図2の通りである。

表1 2019年度の講演会実施状況

回数 (実施日)	テーマ
	講師（当時の所属）
第1回 (2019/7/1)	Lecture “The challenges of Médecins Sans Frontières (MSF)” 「国境なき医師団における挑戦」
	今城 大輔（国境なき医師団）
第2回 (2019/12/16)	UNIDO でのインターンシップを終えて
	村上 秀樹（国際連合工業開発機関 東京投資・技術移転促進事務所次長） 橋本 光弘（青山学院大学社会情報学部4年、 2018年夏 UNIDO 東京事務所インターン） 中野 太祐（青山学院大学社会情報学部2年、 2019年夏 TICAD7にて、AUC と UNICEF 共催のイベントにボランティア参加）

※敬称略



図1 2019年度第1回講演会の様子



図2 2019年度第2回講演会の様子

計2回の講演会に参加した学生47名に、講演会の理解度や2年生以降の取り組みへの参加意欲を調べるため、アンケート調査を実施した。その結果、講演会の参加をきっかけに、国際機関でのインターンシップをしたいと思った学生は22名(46.8%)いた(図3参照)。

加えて、実際に国際機関や国際的なフィールドで働きたいと思った学生も24名(52.2%)いた(図3参照)。よって、2回の講演会を通じて、半数程度の学生には、将来の就職先の一つとして、国際機関を含む、国際的なフィールドのことを意識させられた。

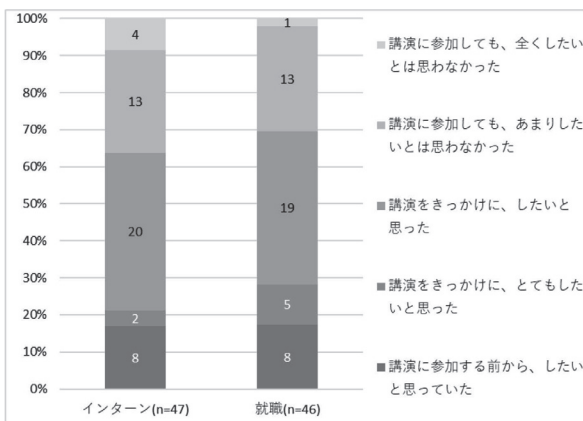


図3 国際機関でのインターン、国際機関や国際的なフィールドへの就職に対する考え

加えて、2年時以降のプロジェクト演習入門、プロジェクト演習で行っている、J-BINGOの活動に対する、参加意欲を確認した。その結果、2年生のプロジェクト演習入門に関しては34名(72.3%)、3年生のプロジェクト演習に関しては32名(68.1%)の学生が参加したいと考えていた(図4参照)。

よって、2回の講演会の実施は、J-BINGO プロジェ

クトへの参加促進のためのPRとしても、十分な効果を達せられた。特に、今年度の講演会では、2年生の学生が活動内容を報告したことも、1年生に対する、良いPRになったと考えられる。

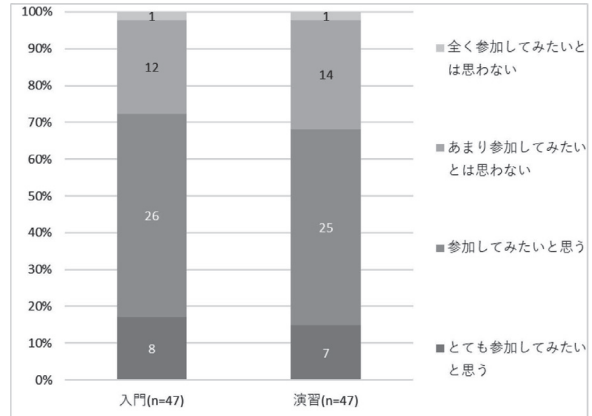


図4 プロジェクト演習入門、プロジェクト演習でのJ-BINGOプロジェクトに関する活動への参加意欲

また、今年度のアンケート調査では、上記までの例年通りの調査項目に加え、J-BINGOプロジェクトに関連した課外活動への参加意欲に関しても、質問した。一つ目は、ゲームを通じ、国際問題等について学べるイベントへの参加意欲である。国境なき医師団日本では、各地の大学において、脱出ゲームを通じて、南スーダンや同国で実施している援助活動について、考えさせるイベントを実施している(株式会社タカラッシュ, 2019)。また、近年では、各地でカードゲームを通じ、SDGsの本質を理解できるイベントが開催されている(一般社団法人イマココラボ, 2019)。J-BINGOプロジェクトとしても、こうしたイベントを通じ、実際に国際問題を理解し、国際協力することに対する、意識付けのきっかけを与えることも、今後は重要になる。

二つ目は、国際機関を視察し、現地で実際に働く日本人スタッフと交流する、スタディツアーへの参加意欲である。実際、他大学では、将来国際的なフィールドで活躍することを希望する学生への導入的プログラムとして、国連本部での、現役国連職員によるブリーフィングの受講を含む、スタディツアーが実施されている(東京外国語大学, 2019)。国際的なフィールドで活躍できる人材の育成という面では、実際に学生たちに、直接、海外で活躍する場面を見ながら、自らのキャリアを考える機会を作ることも必要になる。

三つ目は、国連ユースボランティアへの参加意欲である。国連ユースボランティアとは、国連ボランティア計画（UNV）が実施する、提携大学の学生を開発途上国へボランティアとして派遣し、約5ヶ月間、開発途上国のUNV事務所等において、国連や政府機関、NGOスタッフ、現地の人々とともに開発支援活動に従事することで、単位を修得できるプログラムであり（国連ボランティア計画（UNV）、2015）、（上智大学、2019）。国際的なフィールドで活躍できる人材の育成という面では、実際に海外に赴き、比較的長期間に渡り、国連職員らと共に、活躍できる機会を作ることも必要になる。こうした考えの下、今年度のアンケート調査では、これらの課外活動への参加意欲について、質問した。

その結果、ゲーム系イベントは32名（68.1%）、スタディツアーは35名（74.5%）、ユースボランティアは30名（63.8%）と、6割以上の学生が参加したいと思っていた。結果としては、どの活動に対しても、学生達の参加意欲は高めである。そのため、ゲーム系イベントに関しては、学内で開催した場合でも、ある程度の動員が見込まれる。また、今回のアンケート調査の対象は、英語ができる学生であることも要因の一つだろうが、スタディツアーやユースボランティアのような、海外での活動への参加意欲も高いため、今後、J-BINGOプロジェクトとしても、こうした課外活動の実施に関して、検討していく必要がある。

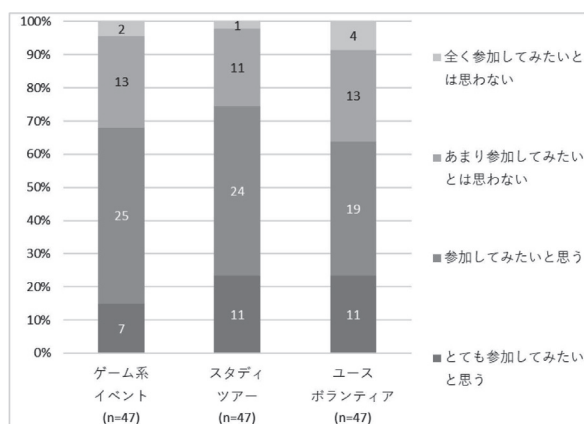


図5 各種課外活動への参加意欲

2.2 プロジェクト演習入門Ⅰ／Ⅱにおける取り組み状況

2年生を対象とした取り組みとして、社会情報学部2年生以上が対象の前期科目「プロジェクト演習入門

Ⅰ」及び、後期科目「プロジェクト演習入門Ⅱ」において、J-BINGOプロジェクトを選択テーマの1つにした。ここでは国際機関等でのインターンの実現に向けて、国際的に働くことを理解するための調査活動に取り組んできた。

具体的には教員のサポートを得つつ、自らが在京国際機関などへアプローチし、様々なヒアリング調査を実施した。その後、それらの成果を活かし、インターンや共同作業等を実践するためのプロジェクト素案を作成することが、最終目標である。

2018年度までと同様、原則、前期から後期にかけてのチーム再編は行わず、1年間同じグループで活動している。結果、2チーム7名の学生がJ-BINGOプロジェクトのメンバーとして活動中である。また、J-BINGOプロジェクトに関係する学生が集まるゼミにおいて、調査等の進捗状況を報告することで、随時、4年生のメンバー、教員からのフィードバックを受けながら活動を進めている。

ゼミの際は、国際的なフィールドで活躍されている方にお話を聞く機会を設けた。今年度は、UNICEF（国連児童基金）東京事務所 コミュニケーション専門官 佐々木佑氏、公益財団法人ラグビーワールドカップ2019組織委員会 人材戦略局人事企画部長 中田宙志氏にお越し頂いた。こうしたゼミでの活動の様子は、図6通りである。



図6 ゼミ活動の様子

更に、今年度はUNICEF東京事務所のご厚意により、2年生履修者の1人が、UNICEFとAUC（アフリカ連合委員会）により、2019年8月29日に、第7回アフリカ開発会議（TICAD7）の公式サイトイベントとして開催された、「アフリカの若者たちの可能性を解き放て」にて、ボランティアとして参加した

(UNICEF, 2019). 2年生を学外のイベントに、スタッフとして派遣するのは、J-BINGO プロジェクトでは初の試みであったが、参加した学生にとっては、良い経験になっている。

今後は、青山キャンパスにて、プロジェクト演習入門Ⅱのファイナルプレゼンテーションを兼ねた、最終報告会を実施する。この場で、2年生たちは、これまでの調査活動の成果を踏まえ、インターンや共同作業等を実践するためのプロジェクト素案の提案を行う予定である。

2.3 特定課題演習Ⅰ／Ⅱにおける 取り組み状況

4年生を対象とした取り組みとして、社会情報学部4年生の演習科目「特定課題演習Ⅰ／Ⅱ」において、J-BINGO プロジェクトを選択テーマの1つにした。今年度は、3年生時の「プロジェクト演習Ⅰ／Ⅱ」にて、J-BINGO テーマを選択した学生2名が、これまでの集大成となる成果として、パンフレット作成やWebサイトの構築を行っている。

昨年度までにJ-BINGO プロジェクトを通じ、関わってきた人々のキャリアを見ると、社会情報学部の学生を考えるキャリアとは、異なるキャリアを歩んできた人が多いように感じる。そのため、J-BINGO プロジェクトが目的としている、国際機関職員候補を始めとした、国際的なフィールドで活躍できる人材について、一般的な社会情報学部生は思い描きにくい恐れがある。

そこで、“学生達に、国際機関をより身近に感じてもらう、J-BINGO プロジェクトに興味関心を持ってもらう”といった目的で、これまでのキャリアにおいて、海外との仕事を経験してきた、青学OB・OGのインタビュー記事を中心とする、パンフレット作成を行っている。具体的なパンフレット構成案としては、表2の通りである

表2 パンフレット構成案

1. はじめに
2. J-BINGO とは
3. 国際的なフィールドで活躍する青学OB・OGのインタビュー記事
4. インターンシップについて
5. 留学システムについて
6. おわりに

J-BINGO プロジェクトでは、2015年度より講演会を実施しており、これまでの実施回数は16回にも及ぶ。加えて、学生達による、ヒアリング調査やインターンの体験等、様々な活動が行われてきた。しかし、これらの取り組みの記録は、その年限りのものである場合も多い。

この状況を改善するため、本プロジェクトの活動内容、様々な取り組みを通じ、得られた成果を記録するプラットフォームとして、Webサイトを構築している。また、このサイトを活用することで、社会情報学部生に対しては、就職先の一つとして、国際機関を含む、国際的なフィールドのことを意識させたいと考えている。本サイトのURLは「<http://www.cc.aoyama.ac.jp/~j-bingo/>」、トップページ画像は図7の通りである。



(青山学院大学 社会情報学部 J-BINGO, 2019 より引用)

図7 J-BINGO プロジェクトのサイトトップページ

また、特定課題演習から参加している学生は、パンフレット作成やWebサイトの構築と合わせ、2年生のJ-BINGO プロジェクトメンバーが実施する、ヒアリング調査やプレゼンの指導も行っている。今後は、特定課題演習の最終報告会にて、これまでの活動成果を報告する予定である。

3. 国際機関連携先調査の実施

2018年度には、各学年の学生が、何らかの形でJ-BINGO プロジェクトに関われる環境を構築できた。これを踏まえ、今年度は、社会情報学部における英語教育やJ-BINGO プロジェクトに関係する演習科

目の内容を改善するため、国際機関連携先調査を実施した。

調査では、国際的に必要とされている人材を明らかにするため、国際機関の人事部局等を対象に、当該団体の仕事内容や我が国との関係の把握、社会情報学部生がインターンや就職をする際の必要な能力、実現までのステップの把握等を目的として、2019年9月8日～13日に掛けて、国連ジュネーブ事務局等への訪問調査を実施した。調査スケジュール等は表3、日本政府代表部への質問事項は表4の通りである。

表3 国際機関連携先調査 調査スケジュール

日時	実施事項
2019/9/8	・現地到着
2019/9/9	・国連ジュネーブ事務局見学 ・WTO 日本人職員2名と意見交換
2019/9/10	・日本政府代表部訪問（大使と面会） ・WTO 訪問 日本人職員3名と意見交換
2019/9/11	・UNCTAD 日本人職員2名、UN 事務局 日本人職員2名、UNHCR 日本人職員1名と意見交換
2019/9/12	・帰国

表4 日本政府代表部への質問事項

1. これまで日本政府代表部と日本の大学とは、具体的にどのような関係を構築してきましたか？特徴的な事例があれば、いくつか教えてください。
2. これまで日本政府代表部が日本の大学と提携して国際的に活躍する人材（e.g. 国際公務員）育成に関わるプログラムなどを構築したことはありますか？もしあれば、それは具体的にどのようなものなのでしょうか？
3. これまでに日本政府代表部においてインターンを行ったことはありますか？ある場合は、大学側に行っているかなど、具体的にどのような形式かを教えてください。
4. 一般に、国際機関において、日本人の人材がまだまだ不足しているといわれますが、それは特にどの分野においてだと思われますか？人材不足に対して、日本政府代表部として、何か手段を講じているのでしょうか？また人材育成の観点において、大学と連携して何か具体的に行っていることはありますか？
5. 日本政府だけでなく、例えば、ほかの国の代表部で国際機関に人材を供給するための対策などを行っていますか？あれば、具体的な例をいくつか教えてください。
6. 日本政府代表部として、どのような人材が国際機関において求められていると思いますか？必要とされる人材において、10年前、20年前とは異なった点がありますか？今後、どのような人材育成を大学は行っていくべきだと考えますか？
7. 社会情報学部での学び（具体的には社会分野、情報分野、人間分野という学際的な学問を行っています）が、国際機関でどのように受け入れられる可能性があるのでしょうか？
8. 日本政府代表部だけでなく、ジュネーブ周辺の高専教育機関（シンクタンクなども含む）と連携して何か行っていることはありますか？あれば、具体的に教えてください。ない場合は、今後、そのようなことを計画していますか？
9. 国際機関において（あるいはより広義に「国際的に」）活躍する人材育成を目的として、日本人会と協力して行っていることはありますか？あれば、その内容を具体的に教えてください。ない場合は、その理由を教えてください。

本調査の目的は、ジュネーブで働く、国連・国際機関の日本人職員、日本政府代表部の関係者との意見交換を通じ、日本人職員の現状、キャリア形成の過程等について、把握することにあった。今回の調査で意見交換をした日本人職員の多くは、学生時代から、海外に興味を持っていたのみならず、学部時代の師事した教員の話・ゼミ、学部のプログラム（例、早稲田大学、関西学院大学）を通して、国連・国際機関に興味を持ち、それをきっかけに国連・国際機関職員を目指していた。そうしたキャリアパスを歩むためには、学生時代に十分な英語力とコミュニケーション能力を伸ばすことが必要だったと回想していた点が印象に残った。

今回の訪問では、J-BINGO プログラムにとって有益な情報を得ることができた。例えば、関西学院大学は、「国連・外交統括センター」を設置する等、先駆的な役割を果たしていること。また、同大学では、国連ボランティア計画（UNV）との協定で、学生を開発途上国（例、ウクライナ、カンボジア、エチオピア、サモアなど）にボランティア派遣をするプログラム、国連ユースボランティア事業（詳細は2.1参照）を実施している。同事業は、関西学院大学を始め、明治学院大学、上智大学、明治大学、立教大学、大阪大学、筑波大学等で利用されており、本学としても、活用の可能性を模索する必要がある（2019年12月時点では、本学は未参加）。

また、今回、意見交換した日本人職員は、学生時代の海外経験、国連・国際機関への訪問の機会によって、国連・国際機関職員というキャリアに興味を持っていた。国連・国際機関への訪問の機会を与えるという点では、スタディツアーの可能性を模索することも必要である。実際、関西学院大学や上智大学、学習院女子大学等、大学によっては、既にこうしたツアーを実施し、一定の成果を上げている。

実際にスタディツアーを実施する場合の内容としては、日本人職員による説明会、日本人職員へのインタビュー、国連施設・国際機関の見学などが考えられる。しかし、ジュネーブの物価は非常に高く、宿泊施設も高額であるため、学生の経済的な負担も考慮する必要がある。

今回の調査を通じ、今後のJ-BINGO プログラムを拡充していく上で、学生が在学中、あるいは卒業後に短期長期に関わらず、海外の大学、大学院への進学・

留学する可能性を積極的に視野に入れ、教育する必要性を痛感した。また、そのためには、十分なコミュニケーション能力と英語力の強化、学生時代のチャレンジ精神を培うような、教育機会の提供が求められる。こうした教育機会の提供方法の検討に関しては、今後の課題となる。

4. 今後の実施方針

2019年度は当初予定通り、English Communicationの取り組みとしては、授業内で計2回の講演会及び効果把握のためのアンケート調査を実施した。プロジェクト演習入門での取り組みとしては、ヒアリング調査を実施しており、今後のファイナルプレゼンテーションでは、その成果を活かした提案を行う予定である。特定課題演習の取り組みとしては、今後の最終報告会にて、これまでの調査活動の成果を報告するのに加え、パンフレット、Webサイトの完成を目指す。

上述の各科目での活動に加え、今年度は、国際機関連携先調査の実施を通じ、次年度以降のJ-BINGOプロジェクトとしての活動の方向性を検討するとともに、現状の課題を整理した。また、次年度に向けては、実際に国際問題を理解し、国際協力することに対する、意識付けのきっかけを与えられる、ゲーム等のイベントに関する調査を行いたい。2020年度においては、今年度の取り組みをより発展させた活動を実施したいと考えている。

【謝辞】

講演会にてご講演頂きました講師の皆様方、J-BINGOプロジェクトのゼミ活動にご協力頂きました講師の皆様方、プロジェクト演習入門Ⅰ／Ⅱのファイナルプレゼンテーションの審査員をお引き受け頂きました皆様方に、感謝の意を表します。

また、国際機関連携先調査の実施に当たり、ヒアリング調査にご協力頂きました各機関の皆様方、本プロジェクトの実施全般にご協力頂きました、国際連合工業開発機関 東京投資・技術移転促進事務所（UNIDO 東京事務所）の村上秀樹次長、UNICEF（国連児童基

金）東京事務所 コミュニケーション専門官 佐々木佑様、外務省、農水省、経済産業省など関係政府機関の皆様方に、感謝の意を表します。

なお、本研究は社会情報学研究センターによる研究プロジェクト「J-BINGO in AGU: Japan Bridge for International Governmental Organization in AGU」の成果の一部です。

参考文献

- (1) UNICEF 「TICAD7公式サイドイベント「アフリカの若者たちの可能性を解き放て」8/29(木)10時半～12時」, 2019年, <https://www.unicef.or.jp/news/2019/0112.html>, Accessed.2019.12.23.
- (2) 青山学院大学 社会情報学部 J-BINGOプロジェクト「青山学院大学 社会情報学部 J-BINGOプロジェクト」, 2019年, <http://www.cc.aoyama.ac.jp/~j-bingo/>, Accessed.2019.12.23.
- (3) 飯島泰裕, 米山明日香, 菊川人吾, 上野亮「The Japan Bridge for International Governmental Organizations: J-BINGO at AGU」『青山社会情報研究』第8巻, 2016年, 75-78ページ.
- (4) 飯島泰裕, 米山明日香, 菊川人吾, 上野亮「The Japan Bridge for International Governmental Organizations: J-BINGO in AGU」『青山社会情報研究』第9巻, 2017年, 63-67ページ.
- (5) 飯島泰裕, 米山明日香, 菊川人吾, 上野亮「The Japan Bridge for International Governmental Organizations: J-BINGO in AGU」『青山社会情報研究』第10巻, 2018年, 78-83ページ.
- (6) 一般社団法人イマココラボ「カードゲーム「2030SDGs」の紹介」, 2019年, <https://imacocollabo.or.jp/games/2030sdgs/>, Accessed.2019.12.21.
- (7) 株式会社タカラッシュ「南スーダン救出作戦～答えは変えられる～」, 2019年, <http://www.takarush.jp/promo/msf/>, Accessed.2019.12.21.
- (8) 国連ボランティア計画 (UNV) 「国連ユースボランティア事業」, 2015年, <https://unv.or.jp/unvjp/unv-youth/>, Accessed.2019.12.21.
- (9) 上智大学「グローバル教育・留学 国連ユースボランティア」, 2019年, https://www.sophia.ac.jp/jpn/global/international/jissengata/active-learning_un-volunteer.html, Accessed.2019.12.21.
- (10) 東京外国語大学「説明会&公募 ニューヨーク国連スタディツアー」, 2019年, <http://www.tufts.ac.jp/documents/student/NEWS/education/19042501.pdf>, Accessed.2019.12.21.